美術講座
ストーブを囲んで

「碌山の兄・望月穂一」を語る

令和四年十一月十二日（土）グズベリーハウス
語る人：望月雄内（穂一孫、当財団理事）

望月雄内氏

みなさん、今晩は。昨年、私のおじいさんにあたる望月穂一について何か話をしてくれないかと依頼がありました。しかし、私は穂一に会ったことも見たこともありませんし、父や母などから伝え聞いたこともわずかですので、あまりお話しできることもありません。それでも碌山の周辺人物を扱ってきたこの「ストーブを囲んで」という会で、碌山の兄・穂一について話しておくことも大切なことかと思いお引き受けした次第です。

まずはじめに、本日お話しする人物の写真を最初にご覧いただきたいと思います。こちらが穂一（図1）、続いてその妻の光代（図2）、そして穂一は婿に入りましたので、義理の父親・舜内（図3）、舜内の妻・ぶん（図4）です。また碌山の長兄・十重十（図5）、この十重十と一緒に写る穂一を見るとずいぶん大男だったことがわかるかと思います。そしてこちらは次兄・本十（図6）です。

今回こういう依頼を受けて家を調べてみましたら、この舜内とぶんの写真が見つかりました。これらはわれわれ一族は誰も目にしたことがないものでした。東京の兄に知らせたら感激しておりました。これまで舜内やぶんの姿については、碌山が描いた《望月肖像》（図7）、柳敬助が描いた《望月ぶん刀自肖像》（図8）しか知られていなかったものですから、こうした写真が発見され、本当によかったと思っています。今回ご依頼をいただいた甲斐があったとも思いますし、こういう良い知らせをみなさまにご報告できることを大変嬉しく思います。そしてさらにぶんを描いた描きかけの板絵も出てきました（図9）。ぶんさんを描いた柳の絵と比べてみると少し似ているように感じられますので、誰が描い

図1　望月穂一

図2　望月光代

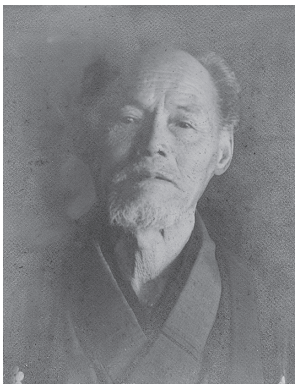
図3　望月舜内

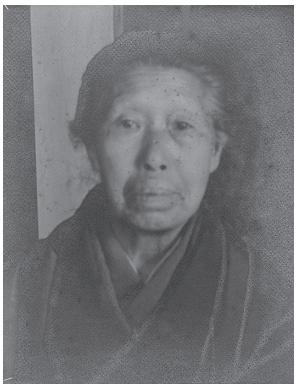
図4　望月ぶん

たものなのかなど、この板絵が出てきたことについてはこれから碌山美術館での研究課題としていただきたいと思っています。ちなみにこれらは大正九年の報知新聞に大切に包まれていました。

それでは限られた時間ではありますが、レジュメに従って①「穂一についての話題が少ない理由」、②「望月家の歴史」、③「穂一について（エピソード）」、④「碌山との関わり、絆」の順に話していきたいと思います。後、時間がありましたら、質問などにお答えしたいと思います。よろしくお願いします。

図5　碌山の家族
前列左より　母りょう、祖母まさ、父勘六
後列左より　長兄妻たま、四兄穂一、長兄十重十

図6　碌山の家族
左から次兄本十、守衛、本十妻玉

穂一についての話題が少ない理由

レジュメの一番初めに「穂一についての話題が少ない理由」とあります。そしてそのように私も感じております。その一番の理由は穂一が昭和五年に五十三という若さで急死したことにあると思います。長く生きていればそれだけ穂一についての話が伝わったはずです。またそのほか考えられる理由としては次のようなものが挙げられると思います。

まず父についてですが。父望月慶治（よしはる）は明治四十一年に生まれ旧制の大町中学に通いました。当時は寄宿舎暮らしでした。金曜日には実家へ帰ってきて、月曜になると戻っていくという生活だったのか、ずっと寄宿舎にいたかはわかりませんが、いずれにせよ穂一と生活をともにしていませんでした。その後父は大町中学を卒業すると、当時としては珍しいわけですが、東京農業大学へ進学しました。当時の東京農業大学は農業振興の時代ですから地主の子を優先的に入れた。もう一つは醸造学科というのがあって、酒、味噌、醤油を生業にしているところの子供を入学させたところです。帰郷してしばらくは実家におり、昭和七年から今の池田工業高校、当時の池田農学校の女子部に教師として奉職しました。そして穂一は昭和五年に亡

図9　望月ぶん下絵
42.5×27.5㎝

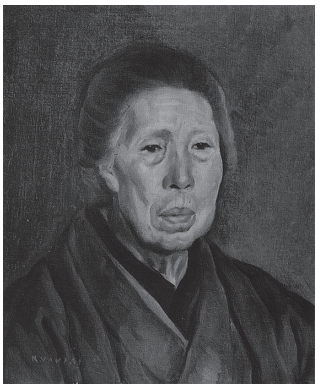

図8　柳敬助
《望月ぶん刀自肖像》1923年

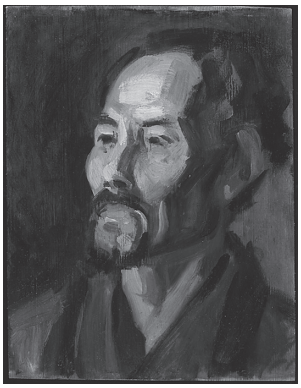

図7　荻原守衛《望月肖像》
1908年　33.5×25.5㎝

くなっているわけですから、このように父と穂一が過ごす時間が少なかったため、碌山のことを穂一から伝え聞く機会が少なかったと推測されます。

父は非常に話し上手で、話すことが好きでした。今日何があったとかそういうことは母によく話していました。それでも人のことを話題にして、その人がどうしたとか、人の悪口を言ったりすることはありませんでした。ですから、たとえ穂一から碌山のことを聞いていたとしても、それが私の耳に入ることもなかったのです。私もおじいさんの穂一はどういう人だったのか聞けばよかったのですが、そういうこともしなかったため、私が穂一について知っているのは母から聞いた話が多いように思います。

つづいて母についてです。私の母は昭和九年に結婚をしておりますので、母が嫁に来た時にはすでに穂一はこの世にいませんでした。ですから母は穂一に会ったことはありません。母は穂一の妻である、光代というおばあちゃん、姑になるわけですが、約十四年くらい一緒に暮らしていたんですね。この十四年の最後の二年か三年は、光代が要するに認知症で、母が健全なおばあちゃんと過ごすことができたのは十年位だったと思います。その間仲良くやっていたのか、不仲だったのかはわかりませんが、子育て等もあったりして、二人の間にどんな話があったのかわかりません。そういうわけで、光代から母に伝わった話も少なかったように推測され、母も穂一のことをあまり知らなかったように思います。

それから、当時親父の弟の康博が家にいましたので、この私の叔父の康博から母は穂一について何かを聞いていたと考えられます。この叔父はなかなかハイカラな人でマンドリンも上手でね、それは今でも我が家にあります。叔父が当時何故うちにいたかというと、まだ結婚していなくていたわけ。この叔父は旧制の大町中学を卒業してすぐ友人とブラジルへ渡ったんですが、次男坊三男坊はだいたい分家するとか新宅を持たせてもらうというわけですから、俺も新宅を持たせてもらう立場だからそのお金を前借りしたいと穂一親父に申し出て、いくら貰ったのか知りませんけど、そのお金を持ってブラジルへ渡ったんです。おそらく西海岸へ着いて、アンデス山脈を越えて東側のブラジルへ渡ったんだと思います。そのアンデス越えの時に連日雨にあってやっとの思いでブラジルのサンパウロへ着いたんですが、その間に風邪をひいたりして病に倒れました。着いたところで結核と診断され強制送還されちゃったんです。その叔父が家へ帰ってきて、母が嫁に来た時には二階で静養していたというわけです。そういうわけで叔父から母は何かしら穂一の話を聞いていたはずだと思います。私が母から聞いた穂一の話のいくつかは叔父が話したものだったかもしれません。

そんなわけで、望月家に穂一の話があまり伝わらなかったのだと思います。碌山の伝記のなかに穂一の話題が少ないのはこうした事情によるものなのではないかと思います。

望月家の歴史

望月家は私で十一代目ですが、祖父の穂一は矢原の荻原家から今の白金の望月家に養子に来ました。望月家の歴史について、ここで振り返っておこうと思います。『望月氏の歴史と誇り』（株式会社日貿出版社、昭和四十四年）という本がありまして、そこに書かれた内容をご紹介します。佐久の滋野族が隆盛を極めた時期がありました。時は奈良平安。滋野氏は清和天皇の第四皇子貞秀親王（八七〇年生まれ）が滋野氏の初代、源になっています。この人が佐久へ来て、滋野井というところに居住していたので、滋野親王と呼ばれていました。この滋野族が九四九年に、現在の佐久市望月のあたりの望月の牧とか望月牧の原といわれる地域に

軍用馬とか農耕馬の生産をしていたところを管理する権限を朝廷から授かりました。当時千頭以上の馬が牧の原で生産されていたといいます。そして今の佐久市や小県郡のすべてを支配下に置いて、約九百年のあいだ松代藩まで代々歴史を刻みました。

滋野族は早い段階で三つに、すなわち海野氏、根津氏、望月氏に分れました。海野のあたりに住んでいたものが海野を名乗り、今でも海野宿ってありますよね、根津という地籍にいたものが根津を名乗り、望月に住んでいたものが望月を名乗ったという、こういうわけです。このうち海野氏の分家が真田のあたりに住み、真田氏となり、松代藩を収めていたことになります。

北佐久郡の立科町、丸子から行って降りたところにこんもりとした山の頂上に非常に大きな津金寺というお寺があります。ご存じの方もおいでだと思いますが。このお寺は七〇二年に行基が開山しました。滋野氏の菩提寺でしたので滋野氏の宝刀が収められています。この大きなお寺から当時の滋野氏の繁栄ぶりがうかがえます。

私も子供の頃に土蔵にあった漆器を見たら裏に滋野と書かれていました。ですから私の祖先は、佐久からこちらに来たものだと思いますし、一説によると群雄割拠のなかで戦乱に負けて、あるいは追われて、逃げのびてこちらに流れ着いたとも言われています。そういう望月家に穂一が養子に来たというわけです。

穂一について（エピソード）

さてここから本題の穂一についてのお話に入りたいと思います。穂一は明治十年に荻原家の四男として生まれ、昭和五年に五十三才で急死しています。長兄は十重十、次兄は本十、すぐ上の三兄千代治は早逝、明治十二年に生まれた守衛、男ばかりの兄弟の中で育ち、やがて兄弟たちはそれぞれの道で活躍しました。

穂一は突然死んでしまったらしいのですが、今でいう胃痙攣、猛烈な腹痛に襲われて、七転八倒するくらいの苦しみのなかで、お医者を呼びます。そのお医者がその痛みを止めるために、おそらく今でいうモルヒネを注射しましたが、ところが痛みが全然取れない。痛くてたまらないので、お医者にもう一本打ってくれと、効かないからもう一本打ってくれと頼み、二本目を打ったところショック死してしまったということです。

穂一は望月家に養子に来てから、事業に手を出します。その理由はわかりませんが、おそらく商売が好きだったんじゃないかと思いますし、事業欲があったんでしょう。当時舜内というお義父さんが隆々として家を守っていました。当時の地主というのは小作の皆さんに田んぼを作ってもらっていたから、実際に田んぼを起こすということはやらないから、時間があったであろうということと、舜内の理解があって、蚕種業に手を出しました。お蚕さんの種の業に手を出したわけですが、その理由は不明です。卵を孵化して幼虫にして、餌付けして、それがある重さになると農家に販売するという仕事だったようです。学芸員の武井さんに聞いたら、当時近所の相馬愛蔵が蚕種の研究をして『蚕種製造論』『秋蚕飼育法』といった本を出版しているほどだから、感化を受けたんじゃないか、ということです。確かに相馬が設立した東穂高禁酒会に穂一は守衛の勧めもあって入会しているし、相馬と接点があったことは間違いないですが、それでもやはり直接のきっかけはわかりません。いろいろ見聞きして蚕種に手を出したのかもしれません。ただ穂一の蚕種は成功していたようで、長野県から賞状を授与されています。

穂一は蚕種だけに満足せず、わさび畑の掘削にも手を出しています。今でも重柳に農産物加工会社がありますが、当時わさび畑を持っている

人たちが集まって加工場、今でいう会社を作って、経営していたということですし、また今の穂高の駅通りに蚕糸業をやっていた人たちがいて、それにも手をつけたと言われていますので、大変事業欲があったというのかな、事業が好きだった人というふうに思います。穂一は明治四十年に県の品評会で、蚕種で県知事賞の二等賞を貰っています（図10）。第三十四回の南信一市七郡とあります。市は松本市、郡は諏訪郡や南安曇郡だと思います。昔の長野県は南北に、今の中南信と東北信の二つに割れていたようなものですから、全県ではなく南信一市七郡だったのかもしれません。こうした賞状があることからも相当一生懸命蚕種業に取り組んでいたんだと想像されます。先ほども申し上げたように、舜内という義理のお義父さんが大変理解があってこういう事業を許してくれたのではないかと思います。

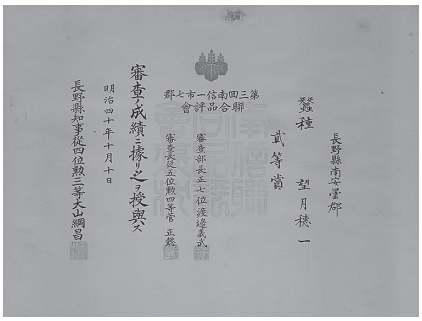
長野縣南安曇郡
蠶種　望月穂一
武等當
第三回南信一市七郡聯合品評會
審査部長七位後藤義武
審査官六位殿四等官　正鄭
審査成績ニ據リ之ヲ授與ス
明治四十年十月十日
長野縣知事從四位殷三等大鍋昌

図10　望月穂一賞状

ちょっと蛇足ですが、私の名前は雄内というんですけど、「内」は舜内から採られています。私の家のすぐ隣が同姓の望月家、屋号は「やまか」というんですが、そこに望月左門さんという当主がいまして、この左門さんは慶應義塾大学の通信で勉強したという相当な人です。この人は後に東穂高村が初めて町制をひいて穂高町になってから町長を務めた立派な方です。左門さん夫婦は私の両親の親になっていまして、その縁で私の名付け親になったんです。私が生れた頃は支那事変から始まってこれから太平洋戦争に向かう只中でした。日本が戦争に向かって進んでいくという猛々しい時代です。ですから男の子には「雄」を付け、○雄ですとか、雄治、雄造というような名前が多かったですし、女の子の「ようこ」という名前の場合、今ですと太陽の「陽」を付けることが多いように思いますが、当時は太平洋の「洋」を付けて洋子という子がたくさんいました。そういった時代でしたので、「雄」と舜内の「内」をつけてもらったんです。親父から伝え聞くところによれば、左門さん曰く、舜内隠居は大変真面目で仕事熱心で、小銭を貯めることが上手で、その貯めた小銭で田んぼを何枚も買ってだんだん財を大きくした人物であるし、九十二歳まで生きた非常に長寿の方だから、縁起が非常に良いから「内」を付けた、とのことです。大変めずらしい名前で、周りからの覚えも良く、私の人生にプラスに働いてくれているように思っていますので、このような名前を授けてくれたことに大変感謝しています。

穂一は写真でもわかるかもしれませんが、背の非常に高い大男で骨格が非常にいい、またいい男でした。母はよく、穂一は手の大きい人だったと言っていました。グローブみたいな手だったと。私は似ていませんが。一生懸命仕事をしたからかどうかはわかりませんが。性格は非常に温厚でした。ただ猛烈に酒が好きでね、大酒飲みと言ったら怒られるかもしれないが、相当お酒が好きだったようです。それでこういう話があります。当時お手伝いさんが家にいたので、夕方近くなってくると酒が欲しくなるから「酒買ってこい」「酒買ってきてくれや」と頼むが、お手伝いさんもいろいろなことをやっているから忙しくてなかなか行ってくれない。そうすると待てないから自分でわざわざ三枚橋に丸五という立ち飲みもできるしお酒の販売もしている商店があって、そこへ自分で徳利を持って買いに行くわけです。ですがお酒が好きだから、その帰り道に道々飲んじゃうという具合で、家へ着く頃には半分くらい飲んじゃって、いい心持ちで帰ってきたようです。ですからそれを心配した奥さんの光代さんが丸五に家に着くまでお酒が飲めないよう頼んだらし

い。とっくりの口をしっかり布で塞いでそれを紐でしっかり縛って簡単に開かないようにして穂一に渡したということです。ところがそれを受け取った穂一は帰りの途中に藤塚というお墓があるんですが、そこの石塔にコンコンととっくりをぶつけて、とっくりの口を開けてそこで飲んでいたということです。そのくらい酒の好きな人だったらしいですね。人を集めて酒を飲むような賑やかなことも非常に好きな人だったといいますし、事業を手掛けるくらいだから人との接し方も上手な人ではなかったかとも思います。

当時は田畑をおこすために農耕馬を皆持っていましたので、秋の収穫の終った後その馬を集めて田んぼで競馬大会を開催することもありました。その競馬大会をやって騒いで遊んでいた。その賞品にこの柱時計と同じものを贈ったらしいです（図11）。母がどこかのお宅で同じものを見たとのことですが、その家がどこかは私は母に聞かなかったため知りませんが、そういうことを楽しむくらい祭りごとが好きだったようです。以上のようなエピソードが残っています。

図11　競馬懸賞時計と同一のもの

碌山との関わり、絆

これについてはいろいろな書籍で紹介されていますが、碌山から穂一へ届いた手紙は私の家に非常にたくさんあったようです。筆まめな碌山ですから、今日書いても明日も書くというような調子でずいぶんあったようです。しかし、その大半の手紙が焼却されてしまっています。これは、先ほどの康博叔父が体悪くして家で療養していたものですから、光代おばあちゃんが家の中を少しは片付けろと言ったところ、誤って焼却してしまったんです。残念ながらたくさんあった穂一宛の手紙のほとんどが失われてしまいました。残ったものは碌山美術館にあります。もし全部それが残っていればまた違った碌山の側面をうかがい知ることができたように思います。それで母は、同じ兄弟でも長男と次男は違うなとよく言っていました。私も三男坊だからそれはよくよくわかります。

碌山は上京すると明治女学校の片隅に深山軒を建てて生活していました。建てるための費用二〇円の無心を穂一にし、その受領の礼状もあります。詳しくは『荻原守衛書簡集』のナンバー16、18、21を参照してください。いかに穂一を頼っていたかということがわかります。

それから碌山が上京する年につけていた日記「つくまのなべ」を見ると、碌山を兄弟が助けたことが記されています。明治三十二年の二月七日には「穂一兄来り、東京行を父と談ず。決定」とあり、井口喜源治に連れられて初めて上京する際の荻原家の相談に穂一も関わっていたことが記されています。当時は家父長制ですから、父親、そうでなければ一番上の兄さんが権限を持っているわけですから、その了解を取らなければ行動に移すことができません。一番上の兄・十重十には年が離れているためなかなか言いづらい、そこですぐ上の兄・穂一にいろいろなことを相談したり、頼み込んだりしていたんだと思います。この東京行きもおそらくは賛成していなかった十重十を穂一が「行かせてやってくれ」と説得してくれたんだと思います。

また八月十七日には「白金へ行く。予の身の上話をなす。五十円かりくる」とあり、碌山が穂一に身の上を、もしかしたら上京して画家になることかもしれませんが、それを穂一に相談していることが記されています。このようにしてみると、穂一は碌山の立場になって、親身になって、支えていたということがわかります。

こちらは冒頭でも紹介した、留学から帰って来た碌山が穂一を訪ねた時に舜内を描いた油彩画《望月肖像》（一九〇八年）です。その時にお土産がなかったので、俺は絵描きだからお土産代わりに絵を描かしてくれということで、穂一が慌てて裏へ行って板を持ってきて鉋をかけて雑巾で拭いて乾かして碌山に渡すと、碌山はあっという間にこれを描いて置いていったというものです。この絵も穂一の碌山に対する仕事の一つということができるでしょうし、碌山の絵の才能を眩しく見ていた、その象徴とも言えるでしょう。

私はこれまで穂一のことをずっと話してきましたが、穂一の上に本十という兄がいます。本十は穂一に負けないくらい、いやそれ以上に碌山を支えました。新宿角筈のアトリエにしても、碌山没後に新宿中村屋のご厚意で敷地に建てられた碌山館にせよ、建築費用は本十が出したと言われていますし、碌山が留学時代に友人から借りたお金も本十が返しました。本十はなぜそんなにお金があったかというと、帽子商として成功していたからです。私はいつも言うんだけど、時代的には少しズレがあるけれども、穂高出身で偶然にも人間の頭と足の両方の装飾品の分野で商売を成功させた人物がいました。頭は帽子、足は靴です。二人の王、帽子王と靴王（ワシントン靴店の東條鑄）がいました。ともに穂高出身であるということが、私には穂高の誇りに感じています。

本十は、荻原家の次男に生まれて、上京して帽子材の商売を始め大成功しているんです。それで碌山のバックアップができたわけです。でも運のない人で関東大震災、太平洋戦争の東京大空襲で二度も商店を焼失してしまっています。私の兄が東京にいますので、本十がお店を開いていた浅草に何か痕跡がないものかと帽子商の組合などを調べてもらいましたが、何も残っていないようです。そして後に長男の十重十が新宿中村屋から生家に碌山の作品や資料が移されると、碌山館を建てて、そして保存をしたというのは、大変なことだったと思います。こうしてみると、十重十、本十、穂一、この三人の兄たちの碌山を支援した兄弟の絆がいかに強かったかと思うにつけ、ほのぼのとした兄弟愛を感じるわけです。そしてそのおかげで碌山があると言っても過言ではないと思います。

まとめ

これまでの話をまとめると、穂一という人は温厚で心優しくて、酒が大好きで、賑やかなことが大好きで、要するに、陽気で明るくておおらかで、いい意味でのお祭り男ではなかったかなと思っています。穂一が碌山を支えたのは、単に弟だったということだけではなく、碌山の才能を認めて信じていたからではないでしょうか。そして芸術家を目指す以上は、なんとか大成してもらいたいという兄の想いや願いの表われだったと思います。碌山はいい兄を、兄たちを持ったものだなと思います。

碌山が三十歳の若さで亡くなったことは大変惜しいかぎりであって、もう少し長生きしていてくれたら、また穂一も支援を重ねたであろうし、碌山のさらなる成功を見ることができたであろうと思うわけです。時間がまいりました。長い間お付き合いいただき、ありがとうございました。